

昭和五十三年十一月二十六日

## 平泉 澄先生 午後部の部

平泉 これが五十年史の辞令です。さっきの評定所記録は、だいたいこんな紙です。恩賜の時計が包まれていた大高檀紙は別のですよ。だいたいこんな大きさです。こんな立派な紙で、こういうのがこんな分厚いもので、一冊ずしつとしたものが何百冊とある。

これがそれを届けられたときの服部先生のお手紙です。

○服部宇之吉さん。

○五十年前のものとは思えないですね。

平泉 五十年前ですから驚きますね。

さっきの評定所記録以上の紙で日記というものが、日光の東照宮、京都の東西本願寺、妙心寺には、徳川三百年の間の日記が残っています。大したものですね。みんな見ましたが、日光は私が全部整理したんだから。

○それは冊子になっているわけですか。

平泉 帳面になっています。今はそんな紙はもうないですわ。どれも使わないし、技術的にも非常に骨が折れるでしょうからね。

○しっかりしているね。

平泉 万代不易の紙ですよ。洋紙にインキではみんな消えるんです。恩賜の時計を包んであった大高檀紙は、たしかにあったんだが、考えてみたら蔵に入っているので出ませんが、これは使った紙で汚れていますけれども豊太閤の文書ですよ。これが大高檀紙で、天正二十年だから、ざっと四百年前です。これは朝鮮征伐のときに高麗国、すなわち朝鮮へ出したものです。朱印は秀吉のものです。

○墨のにおいがしますね。

平泉 紙に縮緬のようなしわがあるでしょう。

○それがその紙の特色ですか。

平泉 特色なんです。これの真新しいのであの時計は包んであったのです。

「鎮西高麗国、一、軍勢甲乙人乱暴狼藉のこと。一、放火のこと。一、地下人百姓等に対し非分の儀申しかくること。右の条々固く停止せしめ畢んぬ。もし違反の輩これあるにおいては、速かに厳科に処せられるべきものなり。天正二十年正月日」

日本軍が今度の戦争で、ほうほうで悪いことをした。戦犯が多かったと米軍も言いふらすし、ほうほうからそういうことをいわれるものだから、日本人は肩身の狭い思いをしています。そんなことはないんだということです。これは日本軍に対する禁制ですからね。朝鮮人にこんなものを出したってしょうがない。秀吉のときでも、秀吉は日本軍を固くいましめている。今度の戦争でもたいいていの部隊は非常に厳重に放火、強姦、強奪をいましめている。そんなこと

をくよくよするな、アメリカがやったことに比べれば、九牛の一毛なんだというんですけどね。

紙の判が大きいでしょう。雄大ですわいな。ペラペラっとして、タイプで打って、どういう字かわからん。カタカナでがたがた書いてすべてがけちくさいですわ。

○一寸変なことを伺いますが、先生はお酒はお飲みになりますか。

平泉 飲みません。酒はいいですけども、いい酒が第一にない。第二に私は国家の重大事に関与しましたが、すべての機密は酒からもれる。昭和二十年まで、私は大学の一教授にすぎなかったでしょう。何らの権力も機関も持つていなかったけれども、機密はほとんど全部知っておった。機密がもれるのはしかるべき地位の人が、酒の席でついよけいなことをいう。ほとんど機密は酒でもれるということを、身に沁みて感じていますから、自分が重大事に関与する場合には酒を飲むではならん。

○若いときからお飲みにならないのですか。

平泉 若いときは第一貧乏だし、体は弱いし。わしは弱かったんだよ。その大野中学校を卒業したんですが、そのときに一緒に卒業したのが三十八名ですかいな。その送別会ときにだれかが悪いことを言って、この中でだれがいちばん先に死ぬだろうか。衆口一致で、平泉だという。それから大正四年にわしは四高を出て東大へ入ったんですが、四高では半分が東大へ行き、半分は京都大学へ行きました。そのお別れの席でまた言い出したやつがいます、だれが先に死ぬだろうという。問題ない。それは平泉だ。

高等学校へ入るときは、無試験制度で、試験は受けなくていいんだが、身体検査を受けなくてはいいけない。受けたところお医者さんが、あなたは高等学校へ入るのはやめなさい。大学を出るまで体もたないという。それでわしは困ってね、歎願したんですよ。体に一生懸命気をつけますから、どうぞ入れてくださいって。それで小首を傾けながら入れてくれたんです。それで四高には全部を通じて寮におったから、自然にみんなと交わってね。ここにおると近所はないでしょう。友だちがないんだ。子どものときでも何もいたずらをして遊ぶことがない。けんかをしたことがないし、相撲を取ったこともない。高等学校へ行つて寮へ入って、やがて寮委員になりましたからね。寮委員になるとすべてのことに関係しないとまずい。相撲部ができたので私は相撲部で、生まれて初めてただ一回だけ、土俵開きに相撲を取ったんです。そうしたところがいきなり出て、何とかいう手でバツとやったところ、相手は二間か三間先に飛んでしまった。みんなびっくりしてやるんだなと思ったでしょう。しかし、それ一回だけで、二度と勝ったことはない。真珠湾だけ勝つてあとは負けたんだ。

それから剣道の本式の試合はそのとき出たんですがいいな。姿勢がいいから形はいいんだ。みんな、やれるんかいなと思つて見ている。スツと出て行つて、しばらくチョンチョンとやって、スポットと横面をやつたらピタツと入った。それもみんながびっくりしてね。横面で勝つということは、よほどの手練の人でなければならぬです。横面が先に見事入つてみんな驚いてワーツとわいたんです。ところ

が二度目はだめ。

それから柔道はね、校長が、溝淵先生といって、四高から五高、三高といった校長ですが、この校長が柔道二段です。それがいつも出られるんですが、校長がいつも、おい、平泉、こいと出して出される。みんな見ていて笑ってね。校長ももうおしまいだ。平泉を相手にするようではということでしたが、とにかく何でもやった。クロスカントリリーレースも出て四里走った。これは二番目ぐらいで通れたんです。

そんなことでだんだん体ができてきて、そして大学へ入った時に、医局におられた先生が非常にいい人でした、その方が私の命の恩人ですわ。非常に親切な人で、そのときに私の妹が十八かで亡くなって、その葬式を済ませて東京へ出たところが、私の脚に傷ができて、それが治らない。医局へ行って先生に見てもらったところ、先生はじっと見ておられて、血の色を見られた。そしてこいいわれたんですよ。薬は飲まんでよいが、冬の寒いときだけ東京におるのはやめろ、三崎へ行って日光に当たれ。これは懇切をきわめた勧告だったのです。そのとおり実行して、これで私の一生が決まったんですよ。日光浴をすることによって健康を得た。もと落合先生と言ってその時分には……。

○ここに学生部の……。これは十二年ですけれども、そこまでおられれば。

平泉 いや、おられませんね。

○学生課の主事補あたりに、医局の先生が入っているものなんです

けれども、あれは学生課の管轄で、もし入っていればですが。

平泉 ありません。神村兼亮という先生でした。その方は二十三年の卒業ですわ。「明治二十三年七月卒業」私は卒業式のあとで先生のところへお札に行っただんですが、その家は伝通院に突き当たって右に行く就多久蔵主稲荷というのがあって、そこに幸田露伴さんはおられたが、そこまで行かない前角の家が、黒塀をずっとめぐらした大きなお屋敷で、そこが神村兼亮先生のお屋敷だったんです。そこへお札に行きました。先生、おかげさまで無事卒業いたしました。先生は新聞で私の銀時計のこともよく知っておられて、非常に喜ばれて、よかった、よくやったということで、しばらく話しておいとまをしようとしたところ、お昼ご飯を一緒にしようというので先生がごちそうしてくださったんですよ。

通りへ出たところに西川という牛肉店があって、牛肉を売っていると同時に洋食屋だったので、そこでごちそうしてくださいました。実に感銘でしたがね。私は医局にはよく世話になったんです。

○それは具合が悪くていらっしやるわけですか。

平泉 私は呼吸器が弱いんです。風邪をひきやすい。それから胃腸が弱い。

○そうすると相談にいらっしやるわけですか。

平泉 そうそう。それであの辺を歩いていると、女の人がよくわしのとをついてくるんだ。たいていしかるべき奥さんが、娘を連れて婚探しにきているんだ。私が行くとゾロゾロゾロ。カモが行くようなものだ。(笑)

○これを見てみると、毎年十二月の賞与は大体八十円ぐらいですが、少ないほうですか。

平泉 少ないか多いかしろないけれども、その時分の八十円という小学校の先生の俸給の一月分でしょうね。私はそれを少ないと思ったことは一度もないし、大学で金をもらおうということも思っていないけれども、それは一般の水準からすれば非常に低いです。文部省が私のなを見て、大学はだめだな、平泉にこんなことをしておくのかと憤慨して、それはみんな言った。局長も言ったし外務省も言った。昭和十五年ごろに私の官等が非常に低いでしょう。その時分の私というのは、ほとんど日本全国を指導するほどの力だったでしょう。大学では非常な薄給で身分の低い待遇ですから、大学というのはこういうことをやっておるのかと、みんな笑ったんですが、自分ではそんなことは何とも思っていない。

大学には終始感謝して、私は東大の前を通るときに、脱帽して敬礼せずに通ったことはないですよ。ただ、終戦後の混乱した大学には脱帽したことは一度もない。二度とあんなけちなところへなど。それはそうだけれども、前は非常に感謝しておる。

それはあなた、ひどいものですよ。講師といっても講座担当の講師が四十何円の月給でしょう。

○月手当百円。講座手当が一年金五百五十円ということは、月に四十円ですね。これが大正十二年です。大正十五年、助教授になられたとき、本俸の金額はわかりませんが、十二級俸です。

職務俸が三百円

平泉 三百円というのは年でしよう。

○本俸が付くと講座俸を減らしたのかな。履歴書はどの辺までを先生がお書きになったのですか。

平泉 私は書いていないんです。

○学業、官職、賞罰なんて書き方も分類されているから。

○大正十二年に文学部の講師になるまでは事務でまず書いて、あとは書き込めということでしょう。だから賞罰でいったん終わってあるんですよ。

平泉 ついでに言っておきますが、大学は非常に薄給だけれども私は何とも思っていない。感謝のみなんです。あとで陸海軍を事実上指導するでしょう。あの時分はみんな軍が恐ろしくて、陸軍、海軍にみんなビリビリですらない。なるべくそれから逃れようとして、みんな一生懸命逃げ回っているような格好であった。ところが陸軍も海軍も非常に私を尊敬し、信頼しておる。平泉はうまいことをやっておると思つて、みんな腹が立つんです。

それならその時分に、私が陸海軍によって何か利益を得ておるかというのと、よく行った一つの例は陸軍士官学校。これは頼まれてよく講義に行った。講義は一時間二十円、二時間で四十円もらう。そのために私はどれだけの金を使ったかというのと、みんなに印刷物を持って行くわけですが、その印刷物はいつも三修社でやってもらう。これに一回だいたい八十円払っている。むろん赤字ですが、それを私はどうも思わない。とにかく戦争に負けたら大変だから、一生懸命教化化しているんで、金儲けに働いているのではない。およ

私は東大以外の私立大学へ行ったことはないですよ。みんなほかの人は私立大学へ行っているが、私は行っていません。ただ一回あるんです。その一回は東洋大学。東洋大学は境野黄洋という人が仏教のほうの大家で、それが学長をしておった。ところが学校騒動があつて学長がいで殴られてけがをし、入院しておられて、だれもあとの引き受け手がない。それで東洋大学から黒板先生に頼みにこられたんですが、先生は私を呼んで、平泉、おまえ東洋大学へ行け、だれも行き手がないんだ、行ってこい。わかりましたとお引き受けして行つたんですよ。打ち合わせに行きまして、いつから、時間はこういう時間か、どれほどの学生かと学生の数を聞いたところ、はつきりわかりませんがと口を濁している。いよいよ行つてみたら六百八人なんです。向こうはそれを言いくいからいわなかつたんです。それで、だれも殴られるのはいやだから行く者はない。それならわしが行こうというので、これだけは一年間行きました。それは例外です。

○いつごろのお話ですか。

平泉 十二年です。それは正式のなにないでないので、出ていないだろうと思います。そういう非常な事態で、やむをえず引き受けたんです。

海軍は真珠湾で勝つて、その大勢が一変するのはミッドウエーですが、海軍は実は全滅してしまつたんです。問題は飛行機で、真珠湾の勝利というのは航空機の勝利で、それを海軍はわかつていなかった。全然それがわかりにならなかつたのが平賀総長。軍艦がみ

んな焼き鳥になつた。あれはみんな平賀さんです。

○それはどういう意味ですか。

平泉 あの人がつくつたんですよ。

○いや、軍艦が焼き鳥だというのは。

平泉 軍艦は上にマストが出ている。あれはみんな平賀総長ですよ。平賀さんが海軍の造船中将で、平賀といえば海軍では神様のようにいわれた人で、全世界に鳴り響いた。あの人はあれでいくと思つていたが、あれではいけません。そんなものは飛行機の前では何の役にも立たない。それを実証したのは真珠湾です。

真珠湾で、航空機はいかなる巨大な戦艦にも勝つということを、実証したのが日本でありながら、その教訓を生かしたのが米国で、日本は依然として長門、大和でいくという。あと山本五十六氏が連合艦隊司令長官、みんなこれでやつてるでしょう。平賀総長は絶対戦艦が強いんだという確信を持っている。この人はそれがなくなつたときは自分の命がなくなるときでしょうね。いま平賀さんの悪口をいうわけではないが、そこで問題はミッドウエーのあと、どうして大勢を挽回するか、その全責任を負うのが霞ヶ浦なんです。飛行機しかない。そのほかいろいろな部隊があるけれども、それはいうに足らない。大局から見ると米英との決戦で大勢を挽回するのは霞ヶ浦で、その霞ヶ浦がすぐ私を呼びにこられた。行つて私もこれは懸命の努力をした。そのときに海軍から辞令をもらつたんですが、報酬年額二百五十円。

○それはどういう資格ですか。

平泉 囑託です。私はそんなことは毛頭意に介してはおらん。それは戦争さえ勝てばいいんだからただいい。自分がそれで暮しを立てる気は毛頭ないんだから。

○昭和十七年十月二十八日、平泉教授に対し海軍省より霞ヶ浦海軍航空隊における業務を委嘱。教授会で一応了承を得ています。

平泉 構内に狐の出た話をしましたね。リース先生のお嬢さんから聞いたことですよ。リース先生が見えたのは明治二十年ですから、そのころ東大の構内にはまだ狐がおったということが、それでわかるんです。

それから震災後初めての会合というのが、日本学会・文科大学の事務室とありますが、これが十二年十月二十七日。井上哲次郎先生が出ておられました。高島平三郎氏もこられ、私が「対馬のアジュールについて」というので話をし、次いで金田一さんが「アイヌの歌謡について」というので話があった。これが学術的な会合の初めです。わりに早いですね。九月にあれだけやられて十月二十七日にやっただけですから、当時、井上先生なんか誇りにされたことでした。講義を始めたのが十一月七日で演習。この日に出了たのが坂本太郎、中村、圭室、という人々です。翌八日は講義で、中世における精神生活。これは六十いくつの沢田老先生も出ておられたし、多久男爵、岩生、それから女の方では、女子聴講生というのは人物がそろってましたね。谷森さんというのは谷森真男の娘で、谷森善臣翁の孫でしょう。明治維新からの大した家ですね。お父さんの真男は貴族院議員でそのお嬢さん。これはできました。もう一人は平山ヒサ。

これはあとで文部大臣になった松村謙三の奥さん。抜群の頭脳です。一人は花井さん、これは花井卓蔵先生のお嬢さんで、お嬢さんは検事総長。こういうお歴々がいて、よくできるんですよ。なかなか女とあなどれない、それはすばらしいものでしたよ。

○よくご記憶でしたね。

平泉 これはちょっとしたものがあって、それから拾い出しておいたんです。

○出発されたのは五年三月ですが、ヨーロッパに行かれました。これは特別なことではなくて。

平泉 ふつうの留学生です。しかし、好意でわりに早く出してもらえたんです。感謝することで、それで私の学問も道も開けてくるんです。

その時分の東大は、前の大正七年から昭和の初めの十年間、表面に出ておらないが非常に難しいときです。内部がすっかり崩れており、非常に難しい時代で、ロシア革命の影響がそこにずっと出ています。それは何ともいえないものですね。その時分に例の森戸辰男事件が起きた。八年正月の「経済学研究」ですね。あの雑誌は残っていませんか。

○残っています。

平泉 私が気がついたときには、雑誌は全部回収されてしまいました。全部写してはおきましたが、それも焼けました。名文でしょう。

○ちよっと見たんですが、たいへんなものだと思います。

平泉 人生の目標は自由なる人格の実現にある。しかるにそれを

阻害するものが三つある。一つは国家、一つは宗教、もう一つは忘れたが。それを排除することが必要であるというのが論文の趣旨なんです。「クロポトキンの学説について」というような標題ですね。そこでこれが問題になったときに、学生の間でこれに反発して奮起したものがおる。それがひとつの団結として出たのが興国同志会です。

○それは上杉先生ですか。

平泉 上杉先生というのでなくて。どうして上杉先生は表面に出られないんですね。上杉先生の影響はやはり強いと思いますけれども、表面に出ておるのはみんな学生ですね。

○竹内賀久治。

平泉 だれですかいの。

○平沼さんの。

平泉 あの竹内さん。そういうのはあるんですが、あのときは何とかいう人が中心でやっていましたね。わしはあまりその人を知らないし、連携はなかつたんですがね。

○そのころ先生はそういう動きにご関心はおありでしたか。

平泉 関心は持っていました。これは重大問題ですからね。国家を破砕し、宗教を否定し、経済組織を破壊しようというんですから、これは重大問題と憂えておったが、私の力が足りないし、動かなかつたんですけれども、そのときにわれわれと憂いを同じくして、いろいろと話をした人は例えば岸信介さん。私より二級ほど下ですわい。彼は法科です。学生のときは妙なもので一年違っても大変なもの

のです。後になれば何でもないけれども、今は岸さんのほうがずっと先輩のような顔をしている。岸さんが病氣だったので見舞いに行ったら、非常に恐縮して、寝ていたのに起きてきたその格好をいまでも思い出しますが、岸さんはいまでもそのことをよく覚えています。

○この間岸さんに伺ったら、興国同志会だということをおっしゃっていました。

平泉 そうでしょう。私は卒業していましたが、岸さんはまだ学生でしたが、一方の有力なあれでした。それから中川善之助は私の一年後輩で、東北大学へ行つて金沢大学長になった。三年ほど前にこの庭へきたんですよ。福井大学の事務局長が案内して、七、八人できたんです。中川はわしの顔をよく知っていたはずなのにケロツとしておる。中川は違うのかいなと思つて、中川さんというのは婦人問題を論じている中川さんですかと聞いた。そしたら福井大学の事務局長が、わしは何も知らんもんだと思つて、中川先生はこういうお方とわしに説教したから、いや、よく知つてるんだ。何もかも知つてるんだ。ただ大正八年にわかれて以来ですから。四高で知つており、その事件のときに知つており、四、五十年か会わないだけのことなんだ。その四、五十年の間、婦人ばかり相手にしたのが中川さん。男子のみ相手にしたのがわし。そうしたらみんなびつくりして、中川さんは非常に感無量の顔をしておりましたが、あの人婦人問題に逃れたんですよ。つまり、この問題は難しいから。これは非常に危険な問題ですから、婦人問題をやっていければ何も問

題はない。そんなことがありました。

それから外務省でどこかの公使になられた石井康さん、これはいい人でしたね。いい人がずいぶん学生で奮起して、この問題は放っちゃおけないというので、憂えて立った人がたくさんいました。岸さんもやっぱりそのときは偉かったんです。みんな立ちあがった。ただ、音頭を取った人にそれだけの統括力がなかったんです。それから山川先生に対する信頼がわれわれは強かったですから、山川先生にお任せして問題を解決してもらおうというふうで、いわゆる学友校騒動とはずいぶん違う。そういう問題があつて、私としてはこの十年ほどは憂うつだったんです。つまり、問題が非常に難しいところへきている。共産主義は津々浦々まで伸びつつある。ところが、これという先生方はみんなのんきであり、政府当局も対策を持っていない。さればといつて自分にこれをどうする力もない。非常に煩悶しておつたときです。

そのときは私は歴史家としての業績が出ていますから、あのままだいけば天下無敵で、それこそ象牙の塔における第一流の学者で立てうるものが、なぜ苦しんだあと、ああいう難しい国事に奔走したのかと世間ではいうんですけれども、私から見るとこの間は非常に苦しかったときです。そのうちにこれは黒板先生のお骨折りですが、外国へ行くことになった。そのときにも黒板先生というのは、ほかの人とは全然違うと思うんですが、その前に文部省で思想善導ということがあつて、思想局というのができたんです。そして日本の古典をみんなに読ませるようにしようというので、今の文章に直した

叢書を出したんです。思想叢書というんですが、黒板先生には日本書紀をお願いした。これを今の人にわかりやすく書き直してくださいということ、先生は引き受けられたが、神皇正統記がやはりその中に入っていたんです。ところがそれはある人に文部省では委嘱することにしていたんですが、黒板先生は聞かれない。神皇正統記は平泉に委嘱すべきものだ。それ以外に適当な人はないと言つて文部省へ申し込まれた。しかし文部省は自分のほうで用意もあつたのか、それは困る、別の人に頼むのだということ、

そのときにたいいていの人なら、文部省のいうことだから仕方ないとなるでしょう。黒板先生はどうしても聞かれない。それなら私は日本書紀を断わるといわれたので、文部省は仕方なしに、わしに神皇正統記を持ってきたんですよ。事情を知っているからわしは引き受けた。わしが断わつたら黒板先生の立場がないですからね。それが外国へ行く直前なんですよ。きつい話だね。

そこで一生懸命あれを今の文章に直した。これは大変なことで、実は外国行きについて用意もしたかったけれども、そんな暇なんかありません。そこで窮余の一策は横浜から船に乗った。船は横浜から出て神戸へ寄つて行くでしょう。みんな神戸で乗るんですが、その間数日違うんですよ。平泉はなぜ横浜から乗ったのかとみんな不思議に思つたんですが、それはその原稿を船の中で書くためです。家におつたのでは人がきてしょうがない。そこで一切を遮断するために船にこもつて書いて、これをたしか香港から送り返しました。

そんなことで三月に出て、五月にマルセイユに着いて、それから



すぐにベルリンに行ったんです。ベルリンには五月八日ごろ着いたんですが、着いたらすぐに母の日でしたわ。それまで日本では母の日なんていうのを全然知らなかったら、ムッターの日というのでいろいろな行事がある。そういうものかなと思つて見ておつたところが、相対性原理のアインシュタインのすぐ近くなんですよ。すぐ近くの下宿を借りたんです。

留学生と言いますが、行つてみて驚いたんですが実質上は学生です。日本で博士だとか、教授だといつても、向こう学生扱いです。そしてまずベルリッツ・シュレーへ行つてドイツ語を一生懸命習ひ、学校へ手続きをとつて入学して、学生としての経路を行くというのがふつうの留学生です。

私はそんなことをする気はない。初め非常に苦しんで、ベルリン大学を調べて行つたんですが、ずっと講義目録を見て、ちょうど中世を担当している講義があつたので、それを聴かせてもらおうと思つて行つた。これがまた凡庸愚劣の助教授でした。研究室を訪ねてあなたの講義を聞かせてもらいたいと頼んだら、よろしい、いま講義に行くからついてこいというのでついて行つた。彼は廊下の途中でとまって、帰るといふので、しようがない私も元の部屋へ帰つた。なぜ、途中で考えが変わつたのかと思つたら、私が風呂敷を持つていたので、それが気になつたんです。部屋へ帰つて、あなたの持つてゐるそれは何だ。これは風呂敷だ。何が入つてゐるという。ノート一冊と辞書が一冊入つてゐたんです。そうしたら非常に安心して、ああ、そうかと言つたんですが、武器が入つてゐると思つたんです。

そんなばか者を殺して何になるんですか。非常に恐れたいんです。

二度目に教室まで行つて話を聞いたんですが、実に下らん講義なので、こんなものは聞いてもしょうがないからやめた。

しかし、だれが偉いのか、どの人がどういふ講義をしていて、それがいいのか、見当がつかない。ベルリン大学はつまりは構内をちよつとろつき回つただけでお願いします。

それから今度はライプチツヒへ行つた。これは非常に私は益した。ライプチツヒは有名な出版屋のズラツと並んだところで、とにかく東大の図書館ぐらいのものが軒並みにあつて、いっぱいの本ですわ。私がまわつた限りでは、世界にこれだけのところはないですね。その本屋をまわるだけでも益がある。それからライプチツヒの大学へ行つて講義を聴かせてもらおうと思つて聴きに行つた。これまた非常に非常に幸せして、ある教授の講義を聴かせてもらいたい。よし、お聴きなさいというので聴いた。演習も聴きなさいというので聴いた。その演習はランケの直弟子であるギーゼブレヒトの「カイゼルツァイト」というのを使つてゐた。それをわしは聴いて非常に面白かつた。済んで帰ろうとしたら、明日もくるかというので、明日もくると言つたら、それじゃここを次にやるから読んできなさいというので本を貸してくれた。こんな本ですかね。

持つて帰つて読んだら非常に面白かつた。そこで翌日までにそれをすっかり翻訳して行つたんです。ところが先生のいわれるには、読んできたかといわれたから、訳してきたと言つたら、これはドイツ

ツ人の癖ですわ、私はあなたに訳してこいとは言わなかった。読んでこいと言ったんだというんです。わしはそれを聞いて、理解しておる。プロフェッサーは読んでこいといわれたが、私はむろん読んだ。しかし、ほんとうに理解することとは、翻訳したときに極めて精密に、的確な理解及び判断ができるから訳してきたんだ。それならあなたはこういうことを感じたかというので、そこで私はギーズレヒトの批判をやったんです。先生はびっくりして、あなた今晚あいているか、家へ招待したいがきてくれるか、一緒に食事しようという。それでその晩食事に行つたんです。五月に行つたんだから六月ですね。さわやかな初夏はつなの夕方非常に爽快な晩でしたわい。先生の食堂というのは二階で、相客は先生の奥さんは亡くなつておられないが、お嬢さんとその若いいなづけと先生で、それに私の四人だった。

そこでいろいろな話があつて、あなたは日本の大学ではどういう講義をしておるのか。私はこういう講義をして、こういう演習をやつておる。どういう著述があるのか。【中世に於ける精神生活】「我が歴史観」【中世に於ける社寺と社会との関係】、こういう著述があるといいましたら、先生は非常に驚いて、ライプチツヒであなたの聴くべき講義は一つもない。どの大学にもほとんどない。あなたがドイツにおいて、これならば話相手になり、これならばあなたを刺激するという学者は一人しかない。それはゲッチンゲンのシュラム教授だ。これがドイツにおける最も新しい、そしてドイツの学界の将来を指導するのはこの人だ。この人だけが唯一のあなたの学友に

なれるだろう。こんなところはやめて行きなさいという。私はまだこの教授の講義も聴こうと思つたがというと、聴く必要はない、あんなものはつまらんから行きなさい。それで全部の学者について、これはこういう人だ、これはつまらん、これはこういう人だが一ぺん会つておきなさいというような指示をみんなしてくれた。

そして、ゲッチンゲンのシュラム教授には私が手紙を書くから行きなさいということで、そこで初めて私は道が開けた。私のドイツ語は貧弱だけれども、意を尽くすことはできる。それでほかのことは放つておいて、そこへ行くということにしたんですが、そのときにまだ何とかいう教授がおつた。

非常に親切に道を開いてくれた人はヘルマンというんです。これはマックススウェーバーの全集を編集した人です。もとミュンヘンの人で、マックススウェーバー亡きあとの始末を全部したんですから、学者として有力な人です。この方が非常に驚きで私を推奨してくれて、ゲッチンゲンへ送り出すということになつたんです。

そのほかにゲッツという教授がライプチツヒでは威張つていたんですが、ゲッツはつまらん、あんなものに会うのはやめなさいといわれたが、この人にも会つてその講義を聴きました。人を見るということは大事ですからね。

そこで今度は道を変えてゲッチンゲンへ行つたんです。これまた面白いことがあつて、ゲッチンゲンへ行くときに汽車に乗つていました。汽車は日本と違って昔の列車のように、一つ一つ横から入るんです。

○コンパートメントです。

平泉 私の向かいにおられる方は、白髪の極めて品格の高いおばあさんで、私と二人だけなんです。狭いところで向かい合っているんですからしょうがない。そうするとそのおばあさんが私に向かつて、どこからきたかという。日本からきた。そうしたらこういわれたんです。どうです、ドイツは気に入りましたか。ガールニヒトと言ったらおばあさんはびっくりして、どうしてですかという。

実は私はベルリンに泊っているが、そのベルリンの宿には主婦がおつて、おばあさんと妹がいる家庭です。その主婦が非常によい人で、日本人のような気持ちのある人でしたが、この人が非常に歓迎しておる。どうしたのかと思つたら、おばあさんが病氣なので、きょうだいがみんな集まつてきて、おばあさんを病院へ送り込もうとしている。それは結構ですけれど、結構でないんだ、病院へ行けば生きては帰らないんだ。日本でもそういう感がありますわい。やつとけという。それはひとつのある制度があつて、病院へ送り込めば、あまり世話にならずに処置してくれるという考えがあるんだ。しょうね。何とかしておばあさんを助けたいと思うんだが、みんなは金もかかることだし、病院に任せようという考えだといえますからね。それなら医者家を呼んで治してもらつたらいいじゃないか。金がかかると主婦は歎くんです。フラウ・フイミュテンベルヒという人でして、フラウ、そんなに心配しなさんな、わしは少し金に余裕があるから。三百円くるんですよ。三百円きてもみんなは遊ぶのに金がかかる。私は遊ばない。書物を買うだけが私の費用ですから。

私は遊んだと思つて金を出すから心配しなさんなと、療養費を私が出したんです。

その話を汽車の中でして、日本では自分の親が病氣になったときには、昔は娘が身を売つてまでも親を助けようとしたんだ。それがいいとは私は思わないけれども、気持は今でもそういう気持でおる。どんな犠牲を払つても親を助け、親の命は延ばしたいと思う。ところがドイツでは自分に負担がかかるのをいやさに、早く処置しようと考え。こういう考えをわれわれは好まない。だから前にはドイツは好きだったが、この事件で実にドイツは道徳的によくないということを考えていると言つたんです。

そのおばあさんは非常に感じましてね。思うに日本は歴史が古くから、道徳的にも非常に崇高なものを持つているのだろう。悲しいことにドイツは歴史が浅いから、まだそこまで人の心が深まつておらないと言つて慚愧された。

あなたはこれからどこへ行くのか。私はゲツチンゲンへ行こうと思う、ゲツチンゲンの大学を目指して行くんだ。それなら私が紹介しましょう。ゲツチンゲン大学の文学部長が哲学のガイガー教授で、そこにあてて手紙を書いた。この紹介状というのが日本では三文の値うちもないですが、ヨーロッパでは紹介状をもらうというのは非常に有効なことです。自分に代わつてどれだけにしてくれるということなんです。そういう紹介状をもらつて行つた。

この人は、わしは全然知らなかつたけれども有名な閨秀作家で、その人の甥はどこそこの大学の教授、息子はどこそこの大学の教授

という名家です。その人が哲学のガイガー教授に紹介状を書いてくれた。

そこでわしはゲッチンゲンに着いたときには、そのおばあさんの紹介と、ライプツヒからの紹介と、二つ持って行ったでしょう。はじめに大学の廊下を歩いていたところ、一人の紳士が立っておられる。その周囲に七、八人の学生が立っていて、いろいろ話をしている。その紳士は非常に気高い様子で、終始温顔でニコニコしておられる。これはガイガー教授のような気がしたんです。それで一人の学生がきたから、あの人はガイガー教授かと聞いたらそうだというので、私はそばへ行つてその紹介状を出した。ガイガー教授は非常に喜んで、ガストカルテ、つまり賓客としての待遇を与えてくださった。こんなカルテをくださった。それを持って行けば大学のどこへでも行けるんです。図書の閲覧、講義の聴講も自由自在。

それからシユラム教授を訪ねて紹介状を出したら、これまた大変な喜びでね。大学で話をして、これから家へきなさいというので家へ行って話をして、それからほとんど連日ガイガーとシユラムの二人の教授が、交代で私を招待されて、お昼ご飯はガイガー教授が自宅へ招待してくださる。晩ご飯になると別のところでしゃべられる。学生がみんなそれについてくるんです。学生もまた実に人情味の豊かないい学生がおつて、そういうのがみんな私の周りに集まってきた。一週間は天国におるような感じで、まことに楽しかった。向こうも喜び、わたしも喜び、ゲッチンゲンは小さな町ですから、みんなと話しながら歩けば知らん間に町を一巡できるほどのところで、

夕方になるとほうぼうのチャーチからベルが鳴る。昔の日本の中世の面影の残っているところで、非常に楽しくそこで暮らして、それからミュンヘンへ行つたんです。

ミュンヘンは、ヘルマン教授がもうあなたは行く必要はない。ここはもう学問としては落ちているといわれましたけれども、ここへ行こうと思つて私は行つたんです。古文書学の教授が非常にいい人で、自分の演習、講義を聞いて行つてくれと言つて、これは大変参考になりました。直接の参考ではないけれども、ああ、こういう教え方をしておられるのかということ参考になつて楽しかった。

そのほかいろいろなことがありましたが、そこではもう一人、私を非常に啓発してくれた人がおりました、それから今度はハイデルベルヒへ行きました。ハイデルベルヒには歴史学者にはろくなのはいないが、哲学でリツケルト先生がまだおられました。ヴィンデルバントはもうおられない。しかし、リツケルト先生には会いたかったので、訪ねて行つてお会いしたんです。ころよく会つてくださった。いろいろ尋ねられ、こういうことをいわれた。あなたはここへきて、日本人はここにはたくさんきておるからにぎやかだろうといわれた。いや、日本人はきておりません。先生は非常にげんや顔で、日本人はたくさんいますよ。いや、日本人はおりません。教授のいわれるのは日本からきた人のことでしょう。それはたくさんいます。日本人はおりません。彼らは西洋文明の糟粕をなめておる連中で、日本の昔の伝統を受けついでおりませんから、日本人ではありません。日本から来た人です。これにはリツケルト先生は非常

に驚いて、あなたはすばらしいことをいうというので、それから先生も真剣になって話され、これはお互いに非常に影響を受けるころがありました。私は西南ドイツ学派の中樞にここで触れたことは、非常に楽しかったことです。

それから今度はぐるっと回って、もう一ぺんベルリンへ帰って、ベルリンでは二人。今度はだんだんドイツの学界の事情もわかり、私のドイツ語もものになってきた。私のドイツ語は高等学校で習ったあと、大学へきてから一年のときに大津康先生、二年のときにはだれだったかな。その時分のドイツ語のいちばんの重鎮です。みんなびっくりして、ああいう先生に習っているのかって、医学の人なんか驚嘆したんですが、文学部のほうの講義も担当しておられた。それが私はどんな点を与えられたのか知らないけれども三上先生は、平泉はひどいやつだ。ドイツ語では百点を取っているといわれたんですが、とにかく点はいい点をもたらしている。しかし、実際ドイツ人の中でどれだけ話せるかわからなかったが、とにかく向こうが親切に意味を汲みとってくれるものだから話ができて、自由になってきた。

そこでベルリン大学ではドイツ史学会の長老の一人であるオンケン教授とマイネツケ教授を訪ねようと思いました。オンケン先生からははていねいな手紙がきまして、あなたの手紙を見たが自分はいま病気で会えないというお断わりの手紙です。これはしかたがない。そこでマイネツケ先生をお訪ねしました。これは紹介なしで行ったんです。自己紹介ですがこころよく会ってくださいました。家は古い家

で、壁にはつたが一面に繁って、それが秋の初めて色づいている。非常に風格のある家でした。

先生の書齋へお通しくださいましたが、混雑しておる書齋となると日本では内藤湖南先生がそういうふうでしたね。いっばいの本の雑然とした中に先生はおられる。マイネツケ先生の書齋もいっばいの書物でうず高い中に先生がおられる。そして耳が遠いのでこうして話をされる。実に温顔で心の深い方でして、そのときの話というのは、やはり一生の感銘ですね。いままって忘れることのできぬ二時間かそこのわずかな時間ですが、感銘ですわ。そして私の尋ねたいと思うことにみな親切に答えてくださり、いろいろ書いてまうてくださいました。それはみんな焼けまして残念ですがね。これがドイツの学問の仕上げです。

それから十月一日にドイツを出て、チェコスロバキアからウィーンを通ってブダペストへ行つて、ブダペストの大学の教授を訪ねた。どんな人がおるのかと思つて、これは興味本位で何も知らずに رفتんですが、これまた面白い人に会つて、その人の書齋へ通された。その教授のうしろがずつと書棚になっておつて、その人の著述が並んでいる。これがみんな自分の著述だ。非常にたくさんさんの著述ですねと言つたところ、わしを一体いくつだと思ふかというから、わしは平家物語を思い出してこれに答えた。先生の風貌を見ると年は若い。しかし著書を見ると仕事が非常に多いから、よほどのお年だらう。大変喜んでね、私の答えもまたよかつたんだね。著述が多いから年はとつているように見えるが、顔を見ると若いから若いんだら

うと、当たり触わりなしにほめたんです。非常に気に入ってね、私に、あなたはこういう著書があるのかというので、自分の著述の話をした。チャーサル・エレメール教授は非常に驚いて、あなたの学風をその表題で察するところ、ドイツにおいてもごく最近に起こった最も漸新なる学風だ。それをあなたはいつどこから学んだ。だからも学ばん、自分でこういうのが当然だと考えたといいましたら、非常な驚嘆でして、最も新しいドイツにおいて前人未踏の境地を行くものとあなたは同等だと言ってほめてくれた。

それからギリシアへ行った。その時分はギリシアまでいくとわれわれも第一に字が読めず、ことばもわからない。しかし、汽車の中にハンガリア人が一人おって、それといろいろ話をして、この人から聞いて非常に感心したのは白鳥庫吉先生。東大の東洋史の教授ですが、この先生に非常に感歎しておる。ハンガリアでは日本という国があるのか、ないのか、実はだれも知らなかった。ところが白鳥博士がきて、そこで初めて、ああ偉大なる学者白鳥、それを生んだのは日本、そこで初めて日本というものに目をつけるようになったんです。白鳥と日本というものを自分からは結び付けて考えるんだという。非常な感銘でしたね。

そしてこの人は自慢が一つある。それは日本手拭のコレクションです。私は白鳥先生というのはいないなあと思いましたがね。

私が大学へ入ったときは、国史概説は黒板先生、白鳥先生は日本の神代史をやられた。非常な感銘でした。私の卒業論文は国史の先生が見てくださったが、あとで、きみの卒業論文を見せてくれと

いわれて、しばらく先生が借りてくださった、すっかり読まれたんです。先生はほんとうの恩師だと思いますがはからずもハンガリアで白鳥先生への尊敬がこれほどまで深いものかと驚いたんです。

それからギリシアへ入ったんですが、途中のどこかでとまるんです。サラトガというところで乗り換えて、またアテネまで行くんですわい。乗り換えのところ難儀したんですよ。ことばがわからないし、プラットホームがないんです。飛び降りるんです。プラットホームがあればいいんだけど、ないものだから、よじ登るんです。ドイツの女というのは、あんなふうになりなさんな。お尻がこんなになる。気持が悪いね。それが登ろうとしても登れない。みんなこうしている。その汽車の乗り換えのところ、わしは荷物はあつとこれからギリシア、イタリアを経てパリまでの五十日間を、大きなトランクを二つ持って歩いたんです。

ところがその汽車の中の車掌が、前に日本に抑留されていた人です。第一次大戦にチェコの兵隊がいたでしょう、あの一人なんです。それが非常にわしに好意を持って、日本では非常に世話になった。無事に帰れたのは日本のおかげだと、乗り換えのときにわしの大きな荷物を持って走ってくれたんですよ。こっちの汽車は遅れて着いて、向こうは出ようとしているので、パーツととんで行ってこっちの荷物を放り上げてくれたので、わしもパーツととび乗ったんです。そして十月末にアテネのホテルへ入って非常に驚いた。ホテルの女中がいうにはあたたかい風呂へ入るか冷たい風呂へ入るかという

んですよ。むしろには考えられない。十月の末に水風呂なんていうのは考えられない。初めて、ああそういうものかと思つてね。私はあたたかいほうがいいと言つて、あたたかくしてもらつて入りましたがね。ギリシアは十日ほど見ましたかね。

○ギリシアには昭和五年十月一日ギリシア国アテネ府に到着と書いてあります。これは届けです。

平泉 届けを出したんですね。それからイタリアへ行つてクロイチエを訪ねた。これは非常に感銘でね。ナポリへ船が着いてそこであがつてクロイチエさんを訪ねた。これはだれも紹介してくれる人がないから自己紹介ですわ。それで行つたところが、非常に喜んで待ち受けられて、いろいろ話をした。書齋を全部解放して、家の中がちやうど図書館のような大きな家として、有力者と見えますね。その中をずっと案内して、いろんな物をくれました。先生の著述も五、六編くれました。それからまたこいというので、翌日もまた行つて、毎日三日か四日行つて、向こうに滞在中クロイチエさんを訪ねないことはなし。写真もくれました。南でクロイチエ、北でマイネツケ、この両先生の考えが同じなんです。私の考えておることとピタツとくる。そこで私の万物流転が出るんです。

私の本を日本を出して図書館が難儀するのは部類分けです。歴史のほうへ入つていないんです。万物流転というのは何だろう。人によつては何ら精密な考証がなされてはいない。私は精密な研究をやつたあと、エキスだけを發表している。それをみんなは、だれそれがいつ書いた論文にはこういうものがある。それによるとこうだと

か、ゴチャゴチャ書くでしょう。そんなことはみんな頭の中で整理してしまつて、エキスだけ書くのが私の主義だし、哲学と歴史とは一緒であつて、分けることができないというような考えですから、私の本は図書館のほうでは非常に迷惑する。

ところがそれと同じ考えがマイネツケ先生で、先生の著述は歴史の表題ではないですわな。そういうことでイタリアに一月、ギリシアに半月いましたかいいな。そしてパリへ入つた。

パリに入つたとき私が非常な苦しみに陥つたのは、フランス語ができないんですよ。日本でやつてたんです。東大でもしばらくフランス語の講義を聞いたんですがね。年とつてから聞いた外国語というのは覚えられない。英語とドイツ語だけは何とかやれるが、フランス語はどうにも身に付かなかつた。それでパリへ着いたとき、単語を十ほど知っているだけなんです。ボンジュール、ムツシユール、はいはできるけれども、あとはどうにもならん。

しかし、わしに非常に勇気を与えてくれたものは、エツフェル塔へのぼつて周囲をながめておつたところ、一人の若者がのぼつてきた。そして一緒にながめておる。わし、その男に聞いたんです。そうしたらその男が恥ずかしそうな顔をして、私はフランス語はわからないという返事をしたんです。わしは自信を得てね、何だ、こいつ澄ました顔をしているが、これもわからないのか、私だけ卑下することはないんだ。

それからベルリッツシユールへ行つたんです。ここじゃ仕方がない、初歩から始めなくては。そうしたところが若い女の子で、わり

にきれいな子ですが、これが先生です。これとどうも気が合わない。どうもばかばかしい。こっちは第一流の学者と交わってきたあとで、あんた、その女の子にとつちめられている。フランス語で、雲はどいう色かと聞いてきた。私は、雲の色は白いと答えた。外人は肩をこうやるでしょう。空をこう指した。それで私が窓から見たところが、なるほど雲は白くない。そこで私は、日本の雲は白い、フランスの雲は灰色だと言ったんです。怒りまして、それでけんか別れですが、しかし、それだけいえるだけの力はそのときに付いたんです。

そして帰ってきて、私はもうベルリッツをやめたと言ったところ、下宿のおばさんのマダム・レミーが、私が教えてあげようというのをお願いしました。マダム・レミーは聡明な方で戦争未亡人ですが、きれいな人でしたね。これは泣きの涙なんです。どういふことかという、お昼のご飯のときに単語を二十五覚える。それから晩ご飯に単語二十五を覚えると、一日五十覚えるでしょう。それを十日間やると五百覚える。とにかく死にも狂いでもそれを覚えるんだ。それは容易ではないですよ。前のを忘れたら何もならないからね。毎日五十ずつ覚えていくでしょう。十日間たつて今度は文章をお昼二十五、晩二十五覚える。文章を十日間で五百覚えると、大体しゃべれるんです。これは泣きの涙ですよ。とうとうやったので、それから私は活動を始めて、有名な教授に会い、ほうぼう大事な場所を調べ歩いたんですが、それは二十日間の速成ですわ。

そして出先から手紙をマダム・レミーに出したところ、マダム・

レミーは自分はあるあなたのような優れたお弟子を持つことを誇りとするといいことで、とにかく文章は名文なんです。ところが実際問題として、マダムから文法は教わっていないんですから変化がわからない。現在と過去の区別がつかないので、何でもいから現在でやって、カッセ（過去）だということです。（笑）それは愉快なものです。どこへ行ってもそれをやっていた。

ところが、いよいよパリ大学のそうそうたる学者に会うことになったんですが、その間に私はずつと研究していて、研究の成果を持つて会いに行つて議論を吹っかけた。すると先生は違う説を述べる。そのとき私はうちでもマダム・レミーと論戦しているものだから、そのくせが出たんですよ。「ノン・マダム」とやった。（笑）そうしたところ教授はびっくりしてね。おかしくておかしくて。よくやれたもんですわな。

しかし、そのおかげで書物ではバルザックを読み、ルックレーを読み、いちばん私が感銘を受けたのは、伝統に書いておきましたがポール・ブルジュエ先生で、これが私の恩師です。とうとう会えなかったんですわ。非常な老齢でしたから、お会いしたいと思つてお願いしたが、ちょうど寒いときで南に避寒しなければならぬので、お会いできないことは残念である。こういう本を読んでもらいたいと、懇切に読むべき書物を教えてくださった。そして写真もあとでもらいましたが、非常にこの人の感銘はドイツのマイネッケ先生と同じように、一生忘れられないですわね。

○フランスはどのくらいいらつしやつたんですか。



平泉 フランスは十二月の初めに入っているでしょう。

○そこは出ていないんですよ。アテネに着いたところだけ届けが出ています。あとの届けは帰朝なされたときです。

平泉 十二月の初めに着いたはずですよ。そしてパリを立ってイギリスに行くのが四月です。「四月七日、パリを立ちてロンドンに至る」と。

○その前、六年二月十八日の教授会で「平泉助教病気のため、満期前帰朝したき旨願出ありたる件は、やむをえざるものとして承認するに決す。」

平泉 それは明日話しますが、この研究は私の学者としてのものですが、その間に知ったことは世界は大動乱に陥るということをご察したんです。そんなことは届けには書けないですから病気ということにしたんです。

○実際は病気ではなかったんですか。

平泉 病気ではない。

○教授会の記録の読み方も難しいね。

平泉 表面に出たことだけで読むのなら、歴史というものは何でもないんです。大学百年史にしても庶務課の記録だけなら、あつてもなくてもいいようなものだ。ほんとうの生命はどういうふうに動いているのか、躍動しておるものをつかまなければ歴史にはならない。

いまのが表面の学者としての動きです。それが済んだら明日もう一つの重大問題に移ります。

○それはそういうご旅行の最中に並行して？

平泉 並行して。みんなと接触し、新聞を読み、民衆の動きを見ていますから、それで考えて重大なところへきておる。

○ヨーロッパをお歩きになって、日本というものをヨーロッパの人はどういふふうに見ていたのでしょうか。ハンガリーの方は、日本はどこにあるのかよく知らなかったという話がありました。が、一般にそんな感じだったのではないかと思えます。

平泉 非常に軽くあしらわれていますよ。また留学生を見れば軽くあしらわれてもしかたがない。

○当時、留学生は多かったのですか。

平泉 多かったですよ。多かったのは当時日本は経済的にいばん安定しておった。ドイツは第一次大戦の賠償金で疲弊の極にあるでしょう。その極にあるところへ、日本の人はみんな威張って行っていたんですよ。冷酷ですね。いすでも何でもみんな持つて帰るという調子でしょう。安くて二束三文ですからね。そういうふうであつたんですわいな。

ハイデルベルヒで私が夜散歩していた。何とかいう川「ネッカー川」の砂浜のところをずっと歩いていましたわい。夕暮れでした。後からヒタヒタと足音がして私のあとを急いでくるものがある。見たところ壮漢ですわ。鉦夫か何かのような大きな男で、あらくれたのが私のところへきて「ヤパーナ」というので私は立ち止まった。「日本人か」「日本人だ」「日本は今度の大戦では英米のほうへ付いたな。」こうきたんですよ。非常な反感ですね。怒り猛ってそうい

うんです。「そうだ。しかし、それはな、もう一つ前へさかのぼると、ドイツはロシア、フランスと手を組んで日本から遼東半島を取り戻したんだ。」「今度はその仕返しだったのか」というので、私は「そうだ」と答えた。これであいか。仲良くしよう。そうかというんです。それはあなた、危急存亡の秋で、私は下手をするとやられると思った。

○あのときは円とマルクの関係で、円が非常に強かったときですね。

平泉 一円が二マルクでした。イギリスでは一ポンドが十円。フランスでは一フランが八錢。ですから千フランといわれたって驚くことは少ない。そうすると、ついみんな遊ぶんですね。

○アメリカへは行かれたわけですか。  
平泉 イギリスからアメリカを通って、概観して帰ってきました。

○東海岸からあがつて列車で横断してですか。  
平泉 例の自由の女神を見て入って、サンフランシスコから船に乗ったんです。私はおそらくここで戦いが起こるだろうと思って、ハワイなどを眺めながらきたんです。

○そういったお考えがあたりだったので、当初ヨーロッパを中心に行かれるはずだったのが、行かれてからでしょうか、ギリシア、アメリカを追加したいということを文学部のほうに言って。

平泉 初めからそういう計画はあったんです。別にそういうことは抜きにして、この機会に回らなければ、たびたび行けるようなと

ころではないですからね。しかし、それは次々に出さないと、初めからこれだけ回るといことはできないです。最初は、「ドイツ国駐在を命ず」でドイツ国に駐在して研究せよという命令ですからね。ドイツを出して、それからだんだん出していけばいい。そういう仕組みなんです。

○そしてお帰りになったのが昭和六年七月十五日「七月九日横浜着」と書いてありますが。

平泉 そうなんです。帰りの船の中で三雲社長と知り合ったんです。これは実にいい人と知り合ったものですね。その船は浅間丸という当時日本一の豪華船です。あとで沈められたんですが、実に雄大な船で、その中でデッキゴルフをやりました。私と三雲さんと原田「熊吉」という陸軍中佐ともう一人陸軍大尉がいて、四人でデッキゴルフをやっていましたかね。原田中佐はあとで中将になって絞首刑。それから大尉はあとで師団長になって、これはいまでも生きておられますが、三雲さんはああいうことで亡くなられた。とにかく三雲さんと私との結託で奄美大島を取り戻したんです。

○助教授が教授会に出られるようになったという時期に、先生が教授会で「現在の制度等につき意見の陳述あり」ということで何かおっしゃっているんですが、これはどういう……。

平泉 記録に書いてありますか。

○昭和四年の行かれる前ですが、行かれるということが決まったあとの九月です。

平泉 教授会で意見を述べたんですか。

○「教授会並びに現在の制度等につき意見の陳述あり。」ですから教授会なり今の大学の制度についてのご意見を述べられたという事です。

平泉 それは何でしょうね。

○その後を続けますと「姉崎、吉田、藤岡、宇野の諸教授及び辰野助教授より意見の陳述あり、右は他日教授会の議題となさずして、懇談的に研究考慮することとす」

その次とその次の次に、やはりそういったことが話し合われていくんですが。

○それは修学旅行の問題ではないでしょうか。修学旅行以外では私はあまり意見を述べておらんと思いますがね。

○教授会についての意見と現在の制度についてです。

○そのあと十月三十日には「平泉助教授より授業に関し現状においては各学科主任教授責任を負う上に不便あり、これをいかにすべきか、及びその他に関する提示あり。」

平泉 わからんですね。

○これ以上は書いてないので、具体的に何があったのか。

平泉 わからんですね。

○それからあと学部規則改正にも関係するようないきなりなんですけれども、ちょっとそれ以上はよくわからないんです。

平泉 助教授の間に助教授会というのがあって、非常にみんなにうっ憤があったんです。しかし私はほかの問題には触れないはずですがね。修学旅行だけは勝手に教授だけで制限をつけられるという

ことで、われわれの一生懸命の努力というのは無視され、禁止されるところということは本意だということは述べておるんです。かなり強かったんですよ。

○ただこれだともう少し広い範囲の話のようですが。

平泉 そんなふうに見えますね。そんな偉そうなことを私は言いませんがね。そういう問題にあまり触れないし、人のことを批判しないのが私の特徴ですわ。森戸事件からあと問題がいろいろ起こるでしょう。例の蓑田胸喜氏、小田村「寅二郎」氏、あれはみんな酷薄に人身攻撃をやるでしょう。私は全然あれには関係しない。世間では私がやったように思うんです。美濃部憲法を攻撃するのも平泉がやったんだというんですが、全然私は知らない。

美濃部先生と私とは妙な話ですけども、憲法の批判は別問題ですよ。およそ私は美濃部批判をやったことはない。書くものではない。判しておりませんがそれを出しておらない。私が二十七のときは、九州帝国大学創立のときで創立委員が美濃部達吉先生。美濃部先生はいろいろ調べて私を国史学科の主任教授として招くという案を立てて、懇切に私に勧告された。二十八、九の時分にいち早く私を主任教授として。私の仲間が助教授で迎えられる人も、助手で迎えられる人もいたんだが、主任教授で迎えるというのはおらなかつた。私をとかく向こうの大黒柱で迎えるからきてくれといわれたんですが、それを私は断わつた。そしてその次にお会いしたときは、何としてもあなたにきてもらいたいと思つて、文部省の松浦鎮次郎君に頼もうと思つていたんだが、手遅れになつてきみが東大に残ること

になったので、もうこの案は仕方がない、やめますといわれたんですよ。

これはまた近衛公が非常に感心された。私を美濃部さんがそこまで見込んで推していることを、近衛公は非常に感心して、そういうものですかねと驚かれたんですよ。

私はそういうゴタゴタしたことにはなるべく触れない。

「五十年史に関して」こういうものをみんな提供して、うちにあるものをみんな持って行った。おじのところの島田剛太郎の卒業写真、そのほかそういう写真が何枚もありました。

○明治二十三年の法科大学の卒業写真とおっしゃっていましたね。

平泉 島田剛太郎と書いてあるはずです。書いてないかもわかりませんが、その写真は当時は珍しいものだったんですね。大久保利謙氏がいろいろ書いていますが、悪意があるはずがないし、何ですけども、目の付けどころが違いますからね。

○東京大学朱光会、昭和六年十一月十八日創立。このときの指導監督者が春山先生。これがそのあとですが、文部省教学局の資料です。東京大学朱光会、これは創立年がちよつと違っているんです。そつちは六年十一月、こつちは七年の二月です。

平泉 この先生はおやめになったんですよ。

○朱光会の指導者をですか。大学をですか。

平泉 ご自分の意思でしょう。やめさせてくれといわれたんですよ。これは本来は教授でなければならなかったんですよ。

私はいつ教授になったんですよ。

○十年です。

平泉 そうするとこのときはまだ教授になっていませんね。

○これは十四年の調査ですね。

平泉 そのときは教授になっているけれども初めのときは違うんですよ。

○では相当の間、春山さんがおやりになったわけですか。

平泉 おそらく私が十年に教授になったときにかわつたんですね。

○実際に朱光会の最初から先生は指導なさっていたわけですか。

平泉 関係しておつたんです。

○七年の二月か、六年の十一月か、どちらかわかりませんが、どつちでしようね。

平泉 どつちでしようね。

○これはもう先生がお帰りになって、その年か、その次の年の初めですから、大して差はないんですけれども。

平泉 これはつまり満州事変から学生がサーッと出てくるんですよ。学生というのは敏感ですね。ロシア革命でパッと増えた。それと同じように満州事変でもパッと増えてくる。非常に敏感です。

○会員数はそちらで二十五人、こちらで四十四人となっておりますが、大体こんなものですか。

平泉 そんなものですよ。

○これは各学部にまたがっているわけですか。

平泉 全学部です。

○中心はやはり文学部ですか。

平泉 法経がずいぶんいます。とにかく総合大学といっても引き出してみたいなものでしょう。各学部がみんな孤立しておつて、ただそれを積み重ねての総合大学ということで、実は何もないでしょう。ところが、私というものがくると全部が一緒に集まる。私の講義はそうですよ。全部がくる。日本思想史とか、中世の何々という講義をすると、法学部、経済学部、工学部、理学部、医学部、農学部、全部くる。とにかくこういう会が私がいればみんなくる。総合大学の実をあげたのは私ですよ。いまもつてそうで、その連中がずつといままで私のところへきます。

○こういう会は七生社は多少何か。

平泉 これは上杉先生ですね。

○この筧先生のは、これも何かご関係があつたんでしょか。

平泉 私どもは関係ありません。例のああいふ古神道で、それはそれで結構でしょう。上杉先生は上杉先生で結構で、私どもと何が違いますわな。

○学生はそれぞれ重複しているという事はなくて。

平泉 重複していません。全部きれいに違うんです。それぞれのにおいが違うんです。

○明日伺うこととしてですね、昭和十三年に日本思想史講座の担当になられましたね。

○神道学講座が十三年度からですけれども、その話が昭和二年ごろから大分出ているんです。

平泉 それはこういうことなんです。最初は上田万年先生、三上参次先生、芳賀矢一先生なんかのおられた時分、私どもの学生の時分から問題が起こつておつた。こういう先生が神道の講座を立てたということでしたが、なかなか実現しないで、教授がなくて助教が二人おりました。田中義能さんと加藤玄智さんの二人が助教でおられたけれども、それは一つの学科にはむろんならない。教授がない。それでずつときて……。

○助教だけという講座なんですか。

平泉 講義があつただけ、講座にならない。それを世話役としては国史のほうで世話をしろということで、黒板先生が教授会では代弁することになっていて、そのままずつときたんです。教授会に黒板先生がおられないときには、私とその代弁者になっていたんです。そしてそれがいよいよ常設するのが十三年ですが、その時が大問題でね。私が教授会でそれを提案したんです。神道学科は充実して教授を置くべきものである。それに、五、六人が立って反駁したんです。例えばある教授は神道って何だ、何でもないじゃないか、大体神道の定義は何だというんです。ある人は、文部省に仰合して、あるいは結託してこういう案が出ることはけしからんとか、いろいろな意見が出たんですよ。何か私が文部省をつついて、文部省と共謀してこういう案を出したようなことだったんです。いちばん激しかったのは東洋史の池内「宏」さん。私は全部の非難が出たあと立ち上がった。私は申し上げましょう。今日、神道学というものの定義がわからない。これは審議に及ばないという意見が出ましたが、何

いたいの、社会学の定義は決まっていますか。ドイツにおいては社会学というのは長い間問題があつて、歴史学がある以上は社会学は要らないんだということで、ドイツ学会における長い論争のあつた問題なんです。いま社会学は決定的にこういう定義ということが、その当時なかつたにもかかわらず、社会学の講座は充実し、教授は置かれたでしょう。それから私がいかに文部省をつついて文部省と連係してこういう案を出したようにいわれるが、そんなことはないんだ。それが残念さに私は前から神道講座を充実すべしと言つておるし、半年ほど前に提案している。そのときに一人の賛成なくして否決された。いま文部省から言い出されて、大学が文部省のしり馬に乗らなければならぬ。

私にとつては非常に心外なことでしたが、皆さんの怠慢及び浅慮のために文部省から圧迫を受けるような立場になつたことは、皆さんの責任であつて、大学として恥ずべきことである。もし、私の案を採つておられれば、逆に文部省を指導しうる立場にあつたんだという論を唱えた。それを私がやつたところ、一人の反対もなく全部これに従われた。そこで神道講座をおかれたということなんです。

もう一つは思想史講座でしょう。これがまた問題でね。とにかく文部省から出たのは国体を明らかにする何を置くということなんです。そこで、どういう名前を受けとるかということになつたんです。日本精神史講座とするか、日本思想史講座とするか。

○国体学講座にするか。

平泉 私は何もいわなかつたんです。前の神道でいうだけのこと

を言つて、私の立場はわかっているんです。それで思想史講座として受けとることになつて、結局、私のところへみんな押し付けられたんですよ。私はどつちでもいいんだ。国史学の第一講座を担当しておるんですからね。それでやれると思うけれども、しかし、今の問題に反対することも賛成することも別に必要はない。黙つていたんですがね。

世間で見ると中と違ふことがあつてね。それをいうと私の本来の趣旨に反して、つい内部のあの人がこういうことを言つておるということ、明らかにするから具合いが悪いんですけれども、世間では有名なお方が実際になると、まるで変わつてくるですわいな。

○日本思想史講座担任を命ぜられ、同時に国史学第一講座の兼担ということですので、日本思想史講座という講座は、とくに新たに人を求めるということをしなかつたんですね。

平泉 しなかつたんです。

○これはずっとそうだったんですか。

平泉 あとまでそうです。

○そういうふうにする意思もなかつたということですか。

平泉 なかつたんです。

○新しい講座をつくつて、人を新たにとつたという構想は全然なかつたわけですか。

平泉 大学ではないですね。第一、人がないんですよ。

○どうもありがとうございました。

(続く)

(校訂 照沼康孝)